

田中ORT(視能訓練士)のちょっといい話

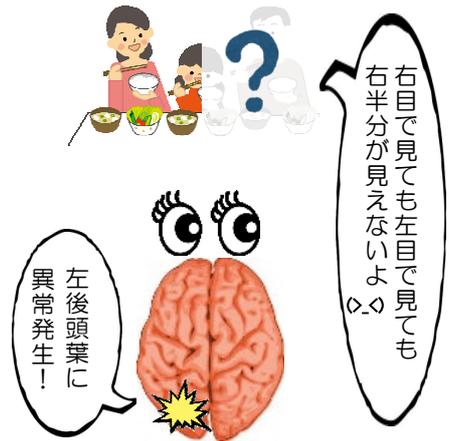
見えるってどういうこと?～視覚のはたらき

第6回(全10回)。目は健康なのに視覚障害!? 視神経～脳の病気

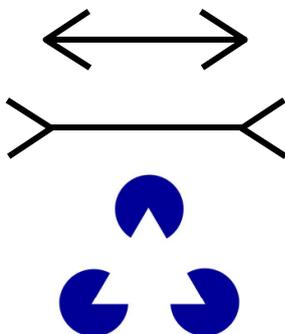
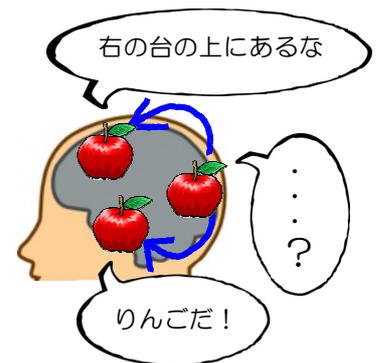
良く見えるためには、目が健康であることが必要ですが、それだけでは見えません。見えるためには「脳」と、目と脳を繋ぐ「視神経」が必要です。

目に入った情報は視神経というケーブルで脳に送られます。視神経に障害が起こると脳に情報が正しく伝わらないので、眼球が何となくでも視力が低下します。

視神経のゴールは脳の後頭葉です(ここで画像が正しく再現されます。)。人間の視神経は途中で枝分かれしてちょっとおもしろい走行をしているため、左の脳が障害されたら「左目が見えなく」なるのではなく、通常視力は落ちないものの、右目で見ても左目で見ても視野の「右半分が見えなく」なります。不思議ですね。(脳の疾患の程度によっては、視野だけでなく視力も障害されることもあります。)



後頭葉で正しく画像が再現されたとしても、それで終わりではありません。ここでは画像が「見え」ているだけで「わかって」はいません。情報は後頭葉から更に側頭葉や頭頂葉に送られ、見えたものが「なに」なのか(どんな名前、意味をもつものなのか)、「どこ」にあるのか(どんな位置関係にあるのか)、といった情報処理がなされます。脳疾患の場合によっては、見えているのに、階段がただの横線に見えて上りか下りかわからなかったり、よく知ってるはずの人の顔がわからなかったり、ということもあるんですよ。



<錯覚図形>

ちなみに、私たちは見えたものをそのまま感じているわけではありません。周辺情報やそれまでの経験からくる先入観によって、同じはずの線の長さが違って感じられたり、視覚情報にはない架空の線を見いだしたりします。

普段何気なく行っている「見る」という活動には、目と脳の高度な連携が必要だったんですね。

次回は、よく比喩で使われる「盲点」のお話をします